

# 神を見る “Star-Gazer”

## Mason & Dixon における科学と宗教

石割 隆喜

Thomas Pynchon の作品の特徴の一つがその宗教性であることは早くから注目されてきた。第1長編のタイトルともなっているイニシャルで“V.”とのみ呼ばれる女性は、歴史家 Henry Adams が西洋の人びとの心を何にもまして捉えてきた力とみなした the Virgin Mary の裏返し、陰画（ネガ）である。The Crying of Lot 49 では、プリント回路のような San Narciso の街並みから Oedipa Maas が啓示を得そうになる瞬間には“religious”との形容詞が付され、Gravity's Rainbow が西洋近代の歴史から暴き出す Elect/Preterite という二分法は Calvin 神学に由来する。Vineland の結末近く、Traverse 家と Becker 家の集いで一族の長老 Jess Traverse は Ralph Waldo Emerson からの一節を読み上げるが、それは彼が William James の The Varieties of Religious Experience 中に引用されているのを見つけたものである。英国国教徒の Charles Mason とクエーカーかつ理神論者である Jeremiah Dixon を主人公とする Mason & Dixon (MD) もまた宗教性を抜きに語ることはできない作品である。従来、『メイスン&ディクソン』における宗教はもっぱら科学や理性と「ラダイト」的に対立するものと解釈されてきた。科学と近代の前提である身体と物質世界に対し、その「他者なる世界」としての宗教的現実の可能性を示唆しているのが同作におけるキリスト教であるとの Kathryn Hume の指摘はその一例である (67)。だがメイスンとディクソンが実践する科学は宗教すなわち彼らが信仰するキリスト教と分離不能な一面をも併せ持つのであり、その宗教と一体となった科学は二人の「見る」という行為と関係があることを本発表は論じてゆく。

太陽視差を求めるため Cape Town で金星の太陽面通過の観測を行うメイスンとディクソンは“Star-Gazer” (MD 136) すなわち「星を見る人」である。彼らを「星を見る人」たらしめているものは見るための道具である望遠鏡だが、望遠鏡はその物質性の介入（低解像度のレンズや下げ振り糸の不具合）により「星を見る人」をしばしば危機に陥れる。『メイスン&ディクソン』ではこの道具の不透明化という異化作用を通じて「見る」ことの文字どおり異なる様態が頻りに立ち現れ、「見る」という行為そのものが前景化される。本作は「見る」ことをめぐる小説なのである。

だが観測に際し、メイスンとディクソンが見るものは太陽面を通過する金星だけではない。金星が現れるや否やディクソンは“Eeh! God in his Glory”と口走り、彼はのちにメイスンに“’Twas seeing [...] our Creator about his Work” (MD 98) とこのときの経験を語る。すなわち太陽を横切る金星に見るための道具である望遠鏡を向けるとき、彼はそこに造化の神の働きをも見ているのである。もちろん神の姿そのものを見るということではなく自然を神の働きの現れと見るということだが、このような意味での「神を見ること」が当てはまるのはディクソンに限らない。メイスン曰く、天文学者は“Him that regulates the movements of the Heav'ns” (MD 59) に仕える者、太陽、金星、地球という三つの天体が一直線に並ぶのは“His artisanship” (MD 93) のなせる業なのである。こうした二人にとって、望遠鏡とは“steps of an unarguable approach to God” (MD 220) を構成する「一歩」にほかならない。

天空を司る神、あるいは神の働きとしての天体の運行という考え方は読むという行為ともつながる。メイスンは天文学者の仕事を天空の動きという神からの暗号メッセージを“solve, and read” (MD 59) することと説明する。この天文学者像はピンチョンの創作ではない。現れた金星を目撃し、神を讃える言葉を口にしたディクソンが思い浮かべるのは“Galileo” (MD 98) である。ガリレオは1623年出版の The Assayer で論敵を反駁して次のようにいう。“Philosophy is written in this grand book, the universe, which stands continually open to our gaze. [...] It is written in the language of mathematics [...]” (Drake 237-38). ピンチョンの“gazer”たちは、ガリレオと同じく望遠鏡という解読のための光学装置を用いて、宇宙という「壮大な書物」に「数学の言語」で記されたテキストとしての金星の太陽面通過の意味をできるだけ精確に読み取ろうとしているのだとすることができる。そしてその「壮大な書物」には神が顕現している。“[T]he glory and greatness of Almighty God are marvelously discerned in all his works and divinely read in the open book of heaven” (Drake 196). ディクソンは、宇宙という書物に書き込まれた金星の太陽面通過というテキストのうちに「全能の神の栄光と偉大さ」を読み取り、カトリック教徒であるガリレオの言葉がこだまするかのように“God in his Glory!”と思わず声を上げたのである。

金星の太陽面通過に接し、ディクソンの連想は“Newton and Kepler” (MD 98) にも及ぶ。ケプラーもまた宇宙に神を見た科学者である。Luther 派の教会に使えるべく Tübingen 大学で神学を学んだケプラーが1596年出版の最初の著作 *Mysterium Cosmographicum* で目論むのは、Copernicus の地動説の立場から“God's motive and

plan for creating [the universe]” (Kepler 49) を明らかにすることであった。ケプラーによれば、人間の建築家に喩えられる神の宇宙創造のための「プラン」の中核をなすのは正多面体である。5種類のみが存在する正多面体と各惑星天球がそれぞれ交互に入れ子状に配置されて宇宙はでき上がっていると、この構造からケプラーは惑星の数（当時知られていたのは水星から土星までの6つ）と惑星軌道の距離の比を説明するのである。

ニュートンにとって宇宙と神がどのようなものであったかは “Newton’s Views upon Gravity and the Holy Ghost” (MD 227) に見てとることができる。 *Mathematical Principles of Natural Philosophy* (1687) 巻末の “General Scholium” において、ニュートンは重力の性質の原因を帰納法に基づく実験哲学が発見できなかったことを認めつつ、重力が引き合わせる太陽、惑星、そして彗星からなるこの上なく美しい体系は “the counsel and dominion of an intelligent and powerful Being” (Motte 544) からのみ生じ得たと述べる。ニュートンにおいて、数学的分析の対象である重力は、力学では説明不可能な方法で世界を創造した第一原因である神もまた「自然哲学」の対象であらねばならないことを示しているのである。

重力についてのニュートンの「見解」が公刊された著作において表明されているのに対し、精霊（より正確には三位一体）についてのそれは私的な文書のうちにとどめられている。哲学者 John Locke 宛の書簡でニュートンが主張するのは、三位一体を証明するために聖書が歴史的に「改悪」を被ってきたということだが、三位一体を退けるニュートンの聖書解釈は彼が Arius 主義者であったことと関係する。異端とされたアリウス主義は神の子 Christ を父なる神と同質とせず、三位一体と、神の一位格（ペルソナ）としてのキリストを否定する。重力が存在する世界、すなわち金星の太陽面通過という天文現象が生じる世界を力学的ではない方法で創造したニュートンの神とは、三位一体を否定する神だったのである。

ガリレオ、ケプラー、そしてニュートンは自然の真理の探究をそのまま神をめぐる宗教的考察でありキリスト教信仰の一形態としたのであり、金星の太陽面通過に神を見るピンチョンの二人の科学者は彼らの直系の後継者であるということができる。英国国教会、フレンド会および理神論、カトリック、ルター派、そしてアリウス派という宗派の違いおよび正統と異端の別も問題とはならない。彼らの一見多様なキリスト教信仰はみな自然の創り主としての神を疑問の余地のない前提として共有しており、彼らはみな自然の背後に神を見ているのである。このことを別の言い方で表すなら、彼らはみな Laplace 以前なのである。太陽系の生成を神に帰するのではなく自然法則のみにより説明しようとし、太陽系の力学的安定を証明することでニュートンの「介入する神」を無用のものとしたラプラスの登場まで、もう少し待たねばならないのである。

天文学と神に関する限り、『メイスン&ディクスン』において科学と宗教は対立するどころか分離不能、一体であるといえる。そしてその宗教と調和する科学は「見る」という行為と不可分である。と同時に、天空に神を「見る」ことは、本作においては地上のものが見えないこととコントラストをなしている。フランスの手に落ちたと分かっているが、攻撃される危険を冒してまでなぜ Bencoolen へと送られたのかという疑問に対する答えをメイスンとディクスンは見出せない。アメリカの地でも、真っ直ぐな境界線を引きながら “We shouldn’t be runnin’ this Line . . . ? [ . . . ] [S]omething invisible’s going on [ . . . ]” (MD 478) と自らの任務に疑問を感じつつも、裏で進行中のその「見えない何か」がアメリカの政治なのかイエズス会なのか、それとも東インド会社なのか二人には分からない。この地上における見え難さからパラノイアが生じるが、このパラノイアをピンチョン研究者は “the view from below” (Hume 66) との言葉で説明する。同じ「下からの眺め」でありながら、現世において自分たちを巻き込み動かしている「何か」を見ることはできず、天空の支配者は見ることができる。このような科学者をピンチョンは『メイスン&ディクスン』で描いているということができる。『重力の虹』に登場するロケットエンジニア Franz Pöklerに通じるアイロニカルな科学者像といえるかもしれない。しかしながら、「下からの眺め」が地上世界でのパラノイアだけではなく、科学を通じ、現世を超えたところで可能となる信仰へと至るものでもあることは、『メイスン&ディクスン』から読み取る必要があるだろう。

#### 引用文献

Drake, Stillman, translator. *Discoveries and Opinions of Galileo*. Anchor Books, 1957.

Hume, Kathryn. “Mason & Dixon.” *The Cambridge Companion to Thomas Pynchon*, edited by Inger H. Dalsgaard et al., Cambridge UP, 2012, pp. 59–70.

Kepler, Johannes. *Mysterium Cosmographicum [The Secret of the Universe]*. Translated by A. M. Duncan, Abaris Books, 1981.

Motte, Andrew, translator. *Sir Isaac Newton’s Mathematical Principles of Natural Philosophy and His System of the World*. Motte’s translation revised by Florian Cajori, U of California P, 1962. 2 vols.

Pynchon, Thomas. *Mason & Dixon*. Henry Holt, 1997.